

# 音楽不況とジャズの未来

## 第7回：ライブ&コンサート・シーンにも広がるチャリティの動き

音楽不況ともいべき現状を分析し、未来への可能性を探る本企画。第7回目となる今回は、前回に引き続きライブ&コンサート・シーンにスポットを当て、先の震災が業界に与えた影響と活発化する被災者支援・復興を掲げるチャリティ公演の動向に注目してみたい。 ●取材・文：近藤正義



イラスト：砂原弘治

あの悪夢のような震災から一ヶ月以上が経過したが、現地の惨状はまだ目を覆う有様だ。今回の震災で被災された方々には心よりお見舞い申し上げるとともに、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

一歩ずつ着実に立ち直るためには、日本全国のみながそれぞれの日常や仕事をこなし、経済を停滞させないことが大切なのだと思う。では、音楽に今、何ができるのか？ そこで今回は通常の業界への考察ではなく、イレギュラーではあるが、震災後に端を発し拡大しつつあるチャリティ・ライブのうねりに注目したい。

### ライブ&コンサート業界への打撃

音楽不況の中にありながらも活況を呈してきたライブ&コンサート業界にも、震災は当然のことながら影響を及ぼした。震災の直後は、被災地周辺はもとより、日本全国において自粛の名のもとにイヴェ

ントが中止され、海外アーティストの来日もキャンセルが相次いだ。

しかし逆にチャリティ・ライブという形でコンサート&ライブ業界に活力が生まれ、音楽不況下のシーンに明るい光を照らしていることも事実だ。ただし、中には「チャリティ」とは名ばかりであったり、収益の行き先や収益金額が不透明なものがあることは残念。ただ、そんな中でも災害を痛む気持ちと音楽の力を信じる想いが結集した純粋なチャリティ・ライブは数多くあり、本当に頭が下がる。

ジャズにおいてもその動きは顕著で、アーティスト主導のものから、厳しい状況下であえて奮起しているライブ・ハウス主導のものまで、形式は様々だ。3月28・29日、エリック・ミヤシロ (tp) の呼びかけにより「ブルーノート東京」で催された《Love for Japan ~ブルーノート東京オールスター・ビッグバンド》、3月27日、川崎市アートセンターにおいて電力不足

を考慮しながら完全アンブラグドで開催された《東北関東大震災チャリティ JAZZ ライヴ》、5月1日に南青山「BODY&SOUL」でベーシスト中村健吾が女性シンガー10人とともに行った《Voices of Hope ~東日本大震災チャリティ・ライブ》(右頁で紹介) など、ミュージシャンのひたむきな演奏とそれを受け止める観客の気持ちが一つになった感動的なライブがいくつも行われている。

### 音楽という手段による復興支援

被災地では本当に、まだ音楽どころではない、というのが実情なのだと思うが、時には音楽を通して人々の傷ついた心が癒やされることもあるだろう。また、音楽を通して集められた義援金が少しでも経済的支援として役立てば…と願う。そして何よりも音楽を通じた人と人の新しい出会いと信頼がひとつでも多く生み出されるのが復興への一助となると信じている。

左：ベーシストの中村健吾と「BODY&SOUL」が連携し、5/1(日)に開催されたチャリティ・ライブ《Voices of Hope》の様相。中村健吾トリオと計10人の女性ヴォーカリストが超満員の観客をわかせた。写真は1stセットの最後を飾ったチャリート(Vo)。尚、本公演のミュージック・チャージの全額527,000円が「あしなが育英会 津波遺児支援金」に翌日寄付された。

右：ステージと客席が文字通りひとつになった《Voices of Hope》フィナーレの様相。左から、若井優也(p)、伊藤君子(vo)、中村健吾(b)、ジーン・ジャクソン(ds)。所在：東京都港区南青山6-13-9 TEL:03-5466-3348(電話予約 17時~) ※USTREAMで毎夜2ndステージのライブ映像を配信中。詳細は公式サイトにて ※http://www.bodyandsoul.co.jp/



このまま黙っちゃいけない!~ジャズ・ライブ・ハウスの逆襲  
Return of Jazz Live House  
File:2  
BODY&SOUL (ボディ&ソウル/南青山)

## いい音楽を提供し、それをお客さんと共有する瞬間を味わったらやめられません

この業界はこれまでにいくつも山や谷がありましたけど、リーマン・ショック以降の景気は本当に良くなかったです。今年の1月、2月は特に。でもこの3月によく上向きになり始めたかな…と思った矢先に大震災が起こってしまって…。日本中が自粛というムードで、活力が奪われてしまいました。こういうのはいけないと思いますよ。直接の被災地でなかった所は通常どおりの生活をしないと、日本全体の経済がダメになってしまいます。

音楽業界も苦しいですけど、被災地はもっと大変。だから私たちは生業である音楽で何か出来ることをやらなくちゃ、と考えていたところ。そこへ健吾さん(ベーシスト中村健吾)が女性シンガーの方々に声をかけて「チャリティ・ライブをやりたい」って申し出てくれたんです。健吾さんの人脈とお店の人脈、ミュージシャンとお客さんが一つになって実現したチャリティー・ライブが《Voices of Hope》です。

お陰様で悪天候にもかかわらず大勢のお客さまにお集まりいただいて開催することができました。集まったお金はどういうと

ころに寄付するのがよいか健吾さんと考えた末、被災で親を亡くされた子供たちに届けることにしました。

音楽、特にジャズはよほど運が良くないかぎり、もともとお金にならない商売。さらにこの音楽不況でしょう。これからは、好きでやる気のあるミュージシャンとお店だけが生き残っていくと思いますよ。うちも前を向いて続けるしかありません。お店を続ける使命感ということ以上に、自分が好きだからやっているんです。私にとって、生きているって一番感じられるのがジャズを聴いている時なんだから、仕方ないですね(笑)。

お店が賑わって、しかも演奏が良かった時は最高の充実感を、逆にいい演奏が聴けなかった時はストレスを感じます。だからうちは商売抜きで出演者にはこだわっています。目先だけの安易なブッキングは絶対にしない。いいミュージシャンを選んでいい音楽を提供し、その時間と空間をお客さまと共有する…そんな瞬間を一度味わったらもうやめられませんよ(笑)。

お客さんの反応があってこそその音楽、

ジャズとはそういうもの。だからこそ演奏者とお客さまを結びつけるためのこういう場所の存在意義があるんじゃないでしょうか。それに「BODY&SOUL」で聴くジャズが一番だ」とお客さんに言ってもらいたくない。ジャズ・クラブの看板を掲げるからには、そんな心意気でやっています。(談)



●関 京子(せき・きょうこ)「BODY&SOUL」オーナー。65年、日本で最初のライブ・ハウス「タロー」を新宿・歌舞伎町にオープン。「京子ママ」として親しまれ、菊地雅章や日野皓正等の日本のジャズ界を牽引する多くのミュージシャンと親交を築く。74年、新宿・百人町にレコードでジャズを聴かせる深夜スナック「BODY&SOUL」を開店。その後すぐライブをするようになり六本木~北青山と移転、92年に現在の南青山に至る。店舗経営の一方で、新人の発掘から育成、公演のオーガナイズに至るまで尽力し、国内シーンにとどまらずジャズ界の発展に大きく貢献している。